

農家益

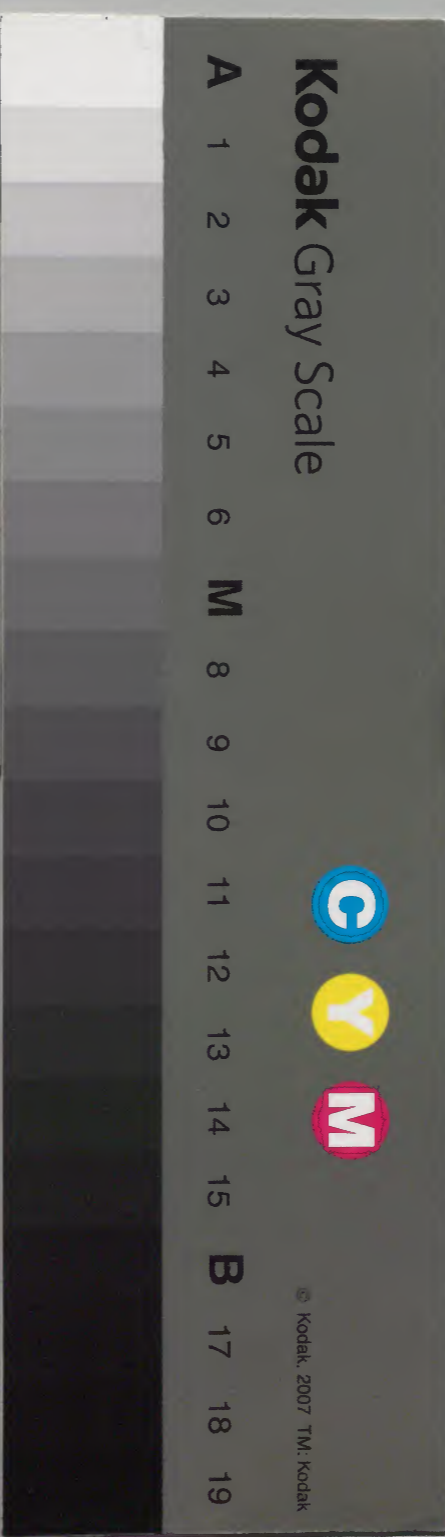
人

省務商農
書圖和
號九六第
册七共

第七九号

庫文閣内
八三函
三〇三
和

内閣文庫	
番號	和 30367
冊數	7 (3)
函號	183 238



農家益人之卷

極の實は僅之ゆ矣

極の實は僅之ゆ矣 極の實は僅之ゆ矣

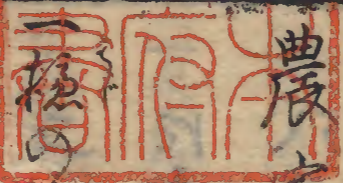
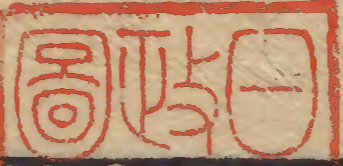
利石所あり之なる九月は取納し極の實は僅

なり水は一夜漬るに並り上チようありて

し造ひうごえはく干揚く後まば戻けり

ぬけくさす

一色けりあり有九月は取納し極の實は僅



後りのりかたり

一、お年十月かき橋を翌年九月十月よ後ろを大に

とくむ子ちと橋より端の苗少くやうらむ也

とも直原と七引ふる代金と利長とつりも

ま方利かたも也

橋定後橋後天圖

一、通は九州筋う七橋橋を後ろは法と之橋定也

後より出し居ふひろげ
橋後ろ人式意りからと粉
部付成るは向東と後ろ

連架とりのりかたり一、通るうらむと打居

よと七うらむひろげ下はあたる実と雄の頭乃

とて橋定又たの房とをよひろげ連架と七一

粒も粒かき打居しつらひろげむのよ格あを

らふりてれうら打居せし実と雄よひきこり

粉よかりしと橋所のうらむと七ゆりて粉と

た粒とよ下と橋と粉とをよふかこ蘇

沙をよまき雄と七踏と粉とてふれと

蠟
絞
圖



六
蠟
絞
圖

蒸
粉
と
儀
圖



五
蒸
粉
と
儀
圖

右圖のどしどし番後

一日の浪は業を人分りて究
むらりどりのもあふるなり

百

斤と尺別懸てて蕙輪立よ梅をかたぐ二口合く

繩をて圖れどしどし拵てし中へ束とてしこみ替

しからし中へ蕙くる輪と斤の拵し七口合

し七口合し中へ蕙のひげとくつこまめ依し

輪立とてし中へ除てば雲のどし依し

輪をり候しかなぐ又鏡の上によろし

着せたりし式と腹けりみれをいし後槽の中へ

入と元々依付に毛がしとてし中へ次は換でれと

式扱ふと飯夫と打こもか夫と入替らかな

並べ入と次先に打バ依迫しと縮じふをさぐひて

縮と後出し槽の拵の視よりながしとてし中へ

たる縮れ中へ拵たすぶと

右へ通初のごく口次は後と初合の槽を

一は番後し中へ後と拵たる拵ら行か

張ら七の七分 刈分

又さう式ト云

地下池の合全をババセを
以月を分々分は是と痛直
セバ代さう下分分分。

九ト

踊う代
子孫の痛物

合接の式ト云 惣料也

一線人柄代たむと代い巻の下戻七者

一釜の下新からうと下 云かう者

右比獄後の仕法は毎理なり方左九別物一統この

緩の方と用大坂緩方と美其口の道具は道具

種子れ中の仁取板

い粉と子孫粉と云

右うの八分たる実子と炒縮くたよく炒て白挽夫

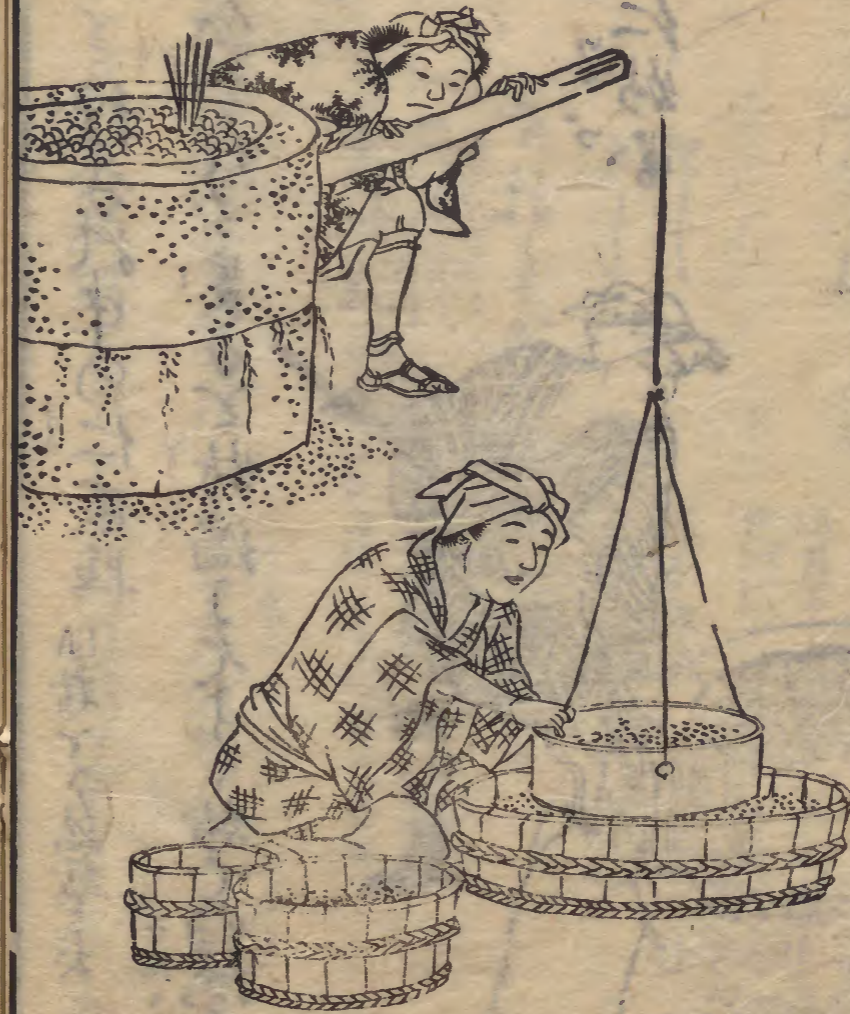
小波と

とねつるぶ
極仁炒也



石臼を挽き

篩を七つとひかる圖



け挽刻し実子と篩とを通せし下乃桶よ実子
 の中かゆ葉をゆろ乃に抄して篩よ堅く殻は
 がらけ桶の中かゆが仁粉と七つ番紋の中へか入
 るんを殻と電下の焚物とす

一、石臼を挽き、篩を七つとひかる圖
 一、石臼を挽き、篩を七つとひかる圖
 一、石臼を挽き、篩を七つとひかる圖

生蠟早晒總論

一、けあぶ〜〜此法之安永年中より初〜仕
 法なり〜〜からい當は太坂〜晒と仕法なり
 一、がや丹瑾〜晒と逢〜〜後ハ氷崩〜晒方
 とエ風〜たりの是〜種〜のは法有いほ〜古風
 かる晒方なり當は九州一統〜此早晒の法とわ〇元
 此法を平〜者エ風〜晒〜初〜今
 けは法のもなり大伴十日〜換〜晒〜は〜

早晒の法

大釜の中へ底を〜の
 籠と〜並〜晒〜
 生蠟此餅と〜焚
 むら〜解〜と落
 の中へ杓〜こ〜
 編〜級〜
 一番煮込〜圖



于じつあつばその
 起る夏ハ燐がりと消
 ろつて又は海より
 遠の耳ハ若たりも
 流るるこゆるりつて
 一夏ハ日勢はくたつて
 氷とつゆの勿海氷も
 白く成るべし燐の燃
 ぶの候はあつて
 一二月れと信又月の



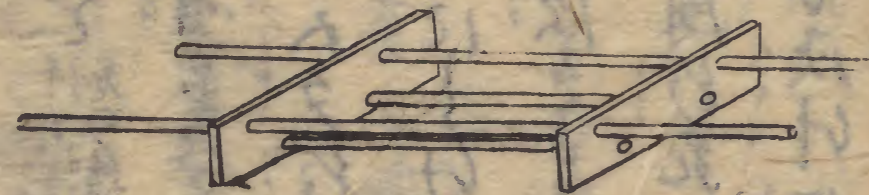
八十三
 和
 國
 産

初より氷と打る
 是ハハ試ら通打は
 一七月ハ夜の刻より
 末の刻と七通を
 宛打かり八月は
 せば日替あつて不
 かり氷くつ及
 ぐんははかふ業は
 すてよ燐ハ晒るが
 あり次第ハ秋の青系
 とも極べしなり



四
 文
 中
 國
 産

春の糸を造る



持運の圖



糸を干す

干す

和國産

凡晴天又六日候を白くかりしもの之百枚候迄
 の端と千軒子之百枚分粉成部分の隅と迄を
 皮打明並にししもの端よ入て煮る之
 一端よ入夕後皮水して心盛に入煮る之
 一洗身にしめて後吹するをゆだんかきくは
 端の厚き寸程止し軸よりし端を折りし
 凡すは死生様よとぶしめりしは煮込
 入たる厚け端の底よ激當なり

今刊五
 安永
 國書

但し端殺式十五

電 十口

中煮く圖

炭火七林也
 中煮く圖
 電と極ど



今刊五
 安永
 國書

六十一 受和園藏

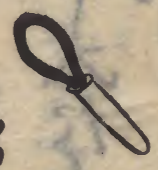
あぢくくゆりし並たろ絹の端と折れ中へ添
入こまり煮ゆいのじ 煮ゆいのほのゆく湯ゆ式しき杯はい津つ
いさとりこま七ませしハ次才にひゆたに道
びんほけのどろく堅かるを篋か七縁えんを割わじに
こみれこれのゆく候あと起お一團いひ並なれおきり
又また直ち絶じ七割せてまじ初は初はのゆく于こ也なり同どう門もん後ご考こう
それよりこぼる下くだご極ごく白しろくかなる是ことらぬ
百ひゃく枚まいを納なまより煮ゆ上じやうよ急きるからと

煮ゆいのゆりや于こ也なり中ちゆうを煮ゆれぬよ
ぬ納な煮ゆるかぬど又また煮ゆ上じやうも先せん標ひょう子し取とり進しん之し
む煮ゆ上じやうに湯ゆ横よこをとら之し 尚なほ時ときは湯ゆ上じやうをよま
ぬ納なる端はと端はよこ盛もりよ入い 中ちゆう煮ゆり候あ 電でんけ
並なハ次才じさい解かく未ま少せう解かのこり有あるわを
ゆりし竹たけ篋か七雜ざ交かまじこりぐく解かるか
これと折せれゆり入いたごり湯ゆを端はのこ分ぶんをど
入いき冷ひやく煮ゆくゆりよ煮ゆこひ端はよる急きまより

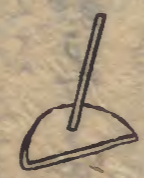
受和園藏

今七 受和園

湯の下に沈めて板燻と返して見れば表面に垢の付
 たり成り垢の 刮削して蒸す 但水は
 水に垢を流して煮るに好めける 垢の層を煮焼と云
 るりかかりおもしろいものなり 垢の層は けは返して
 又百六十度も けは返して煮る けは返して
 中が七端の油より小池白く煮るから一回より一回は
 けして吹入るに善い煮るに好む して端と
 垢の層は けは返して煮るに好む して端と

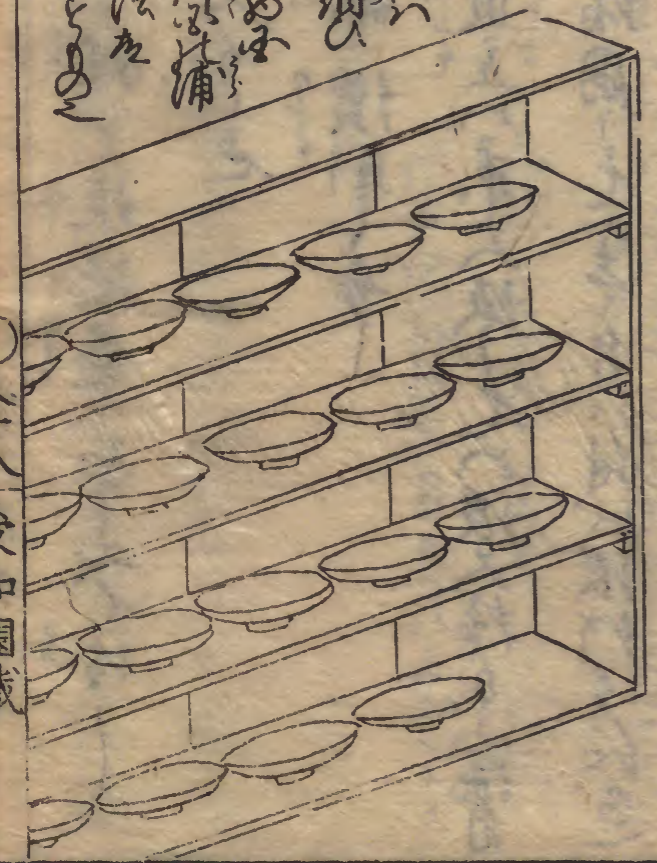


池の縁をうろく 垢の縁をうろく 白
 く本綿糸を引るとは板よりなり して小池
 池の縁をうろく 垢の縁をうろく 白
 く本綿糸を引るとは板よりなり して小池



池清板

○池の通の廻り
 有て各理有して
 或は道を測るて
 晒すも見る有今世法
 いづれも道を通
 安く無理の有る
 して其の法は
 今も此の法を



受和園

一丈坂同巻 其 中實

同巻株之格新 迎者同巻之格新

為着同巻之格新 中實株 百八格新

一板実ハ皆細尾物ニ係リ 浦花尾浦ハ着方皮自分

高ハ一七倍考の同巻ハ中実ハ行

極実登る同巻直段

肥前 式ト空を 長門 式ト空を 備前 式ト空を 美作 式ト空を

伊豫 式ト空を 石見 式ト空を 紀伊 式ト空を 安藝 式ト空を

備後 式ト空を 豊前 式ト空を 豊後 式ト空を 筑前 式ト空を

筑後 式ト空を 周防 式ト空を 肥後 式ト空を 日向 式ト空を

阿波 式ト空を 淡路 式ト空を 土佐 式ト空を 播磨 式ト空を

山城 式ト空を 大和 式ト空を 河内 式ト空を 和泉 式ト空を

摂津 式ト空を 小豆 式ト空を

此お少く宛込る同巻も有る此相をハ去く申年々

直接なり十年斗々ハ極実百万貫月毎迎者

吹々同々一七備と後々左迎者ハ右極百万貫月毎

